

東日本大震災レポート

～災害支援協力に参加して～

保健師 服部敦美

5月17日から22日までの6日間、岐阜県から要請を受けた県内保健師と県職員の合計4人が被災地である岩手県陸前高田市に派遣され、災害支援協力に従事しました。

笠松町の人口と同規模の陸前高田市は、市中心部の市庁舎を含む全世帯の7割以上が津波による壊滅的な被害を受けました。被災地を訪れた私の目には、テレビなどで見聞きしたこと以上の光景が飛び込み、信じられない状況にがく然とするとともに心が痛みました。

私たち保健医療チームは、市内の高田第一中学校の教室に事務所を構え、他県から派遣された医療・保健関係スタッフと共に、「医療・看護チーム」「保健師チーム」「こころのケアチーム」「リハビリチーム」などに分かれ、各チームによる連携の下で活動をしました。私は「保健師チーム」として、高齢の方や障がいをお持ちの方などを対象とした要援護者台帳の整備や、避難所で生活されている方の健康相談に従事しました。



陸前高田市の希望の松

事務所を構えた中学校も避難所となっており、未だ400人以上の方がプライバシーの保たれない環境の中、充分睡眠がとれないなど身体的、精神的にも不自由な生活を送って見えました。しかし、そのような中でもお互いに行きわたる役割分担をし、避難所の中で被災者同士が助け合いながら生活して見えました。また、校庭に建ち始めた仮設住宅では新しい生活も始まっていました。

被災された方から「これからのことを考えると不安だが、皆さんに応援してもらっているから頑張らない」という前向きな声を聞き、私たち保健師も元気をいただきました。し

かし「頑張らない」という気持ちの反面で、将来への不安、地震・津波の恐怖、身内を亡くされた悲しみなどは今後も続くものであり、継続的な「こころのケア」の必要性を感じました。

陸前高田市には「希望の松」と名付けられた松があります。海岸線沿いの景勝地「高田松原」は2kmにわたって7万本の松林がありましたが、津波の被害を受け、たった1本残っただけでした。その松は復興のシンボルとして被災された方を勇気づけています。

今回の派遣活動を通して、災害に対する危機管理意識を常に持つ必要があること、また災害時には一人ひとりがそれぞれ自己判断で行動できるようにすることが必要だと感じました。また、災害時だけではなく、日ごろから人と人との支え合い、つながりの大切さを強く感じました。

最後に、亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々の1日も早い復興を心から願いつつ、これからも私にできることを続けていきたいと強く感じています。



スタッフと打ち合わせをする服部保健師(右から2人目)

